

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 支援-35

学校名・団体名	熊本市立帯山西小学校
HPアドレス	http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/school/e/obiya-manishies/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	宮城県気仙沼市立階上小学校との 交流プロジェクト
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>4年生で初めて階上小学校との交流を学ぶ子どもたちに、2つの震災を介したこの双方向の交流がこれからもずっと帯山西小の宝として残っていくように、交流を支えてきた先輩たちの活動、交流をつなぐキーマンの存在などを学ぶ中で、多くの人とのつながりが強く、そして、広がっていることに気付いてもらいたい。</p> <p>さらに、この学習を通して、相手を想う（想像する）心を育み、それを周りやこれからの自分の生き方に広げていってほしいと願っている。この交流が今後も末永く続いていくための第一歩として、これまでの5年間を「冊子」にまとめたいと考える。</p>	

1 教師の願いと活動の価値

平成23年3月11日、東北地方太平洋沖地震が起こった。未曾有の大災害に信じがたいほどの衝撃を受けると共に、被害に遭われた方々のことを思うと胸が痛んだ。

平成28年4月14日と16日、熊本地震が起こった。震源地から少し離れているとはいえ、大地はこんなに揺れるものなのかと信じがたい恐怖が襲った。大人でさえ経験したことのない恐怖を味わった。子どもたちの衝撃はいかばかりであったか。5年間交流してきた宮城県気仙沼市の階上小学校のことがすぐに浮かんできた。これまで、友達として寄り添ってきたつもりであったが、改めて東北の方々の置かれた立場や恐怖、絶望感がどれほどのものであったのかに気付かされることとなった。

5年前の9月から、「東北3県に国語辞典や英語辞典、絵本を送ろう」というボランティアへの呼びかけに応じて、当時の4年1組で取組を始めたことがきっかけとなり、支援から始まった活動が交流へと実を結んでいる。熊本地震後、学校は3週間の臨時休校となり、学校が避難所になった。誰もがはじめてのことばかりで戸惑った。「そうだ。階上小学校に尋ねよう。」職員が家庭訪問をして得た子供や校区の情報、避難所となった学校で対応に追われる職員からの疑問をもとに、階上小学校へ連絡をした。

すでに階上小学校からは安否確認の電話が入っており、みな心配されていた。1回目は、避難所運営について防災主幹から、2回目は学校再開について教務主任から丁寧な返事をもらい、学校再開まで大変スムーズに進めることができた。階上小学校では、「今度は、私たちが助ける番。力になれてよかった。」と話されていたそうだ。5年間のつながりを実感した出来事だった。

これまでの交流を支えてきたのは、「被災地に本を送ろうプロジェクト」「階上小とつながろうプロジェクト」「階上小となかよくしようプロジェクト」「階上小となかよくし隊」と名前を進化させながら、その年その年の活動を続けてきた先輩たちである。

この活動をしてきた卒業生が、避難所になった本校に大勢集まりボランティア活動を自主的に展開した。物資の運搬、食事の準備や配布、トイレ掃除、ごみの分別、そして、話し相手。それは、避難されていた方に感動、感謝され、また、在校生は先輩たちを見習って次々に「私にもできることはありませんか。」と言ってやってくることとなった。学校再開の前日は、卒業生と在校生のボランティアとその保護者の方々、職員たちとですべての教室の清掃をし、子どもたちを迎えることができた。

このことから、4年生で初めて階上小学校との交流を学ぶ子どもたちに、2つの震災を介したこの双方向の交流がこれからもずっと帯西の宝として残っていくように、交流を支えてきた先輩たちの活動、交流をつなぐキーマン（階上小学校児童支援センターを立ち上げた佐藤さん、水仙をおくってくださった一関市の今野さん、階上小の先生方）の存在などを学ぶ中で、多くの人とのつながりが強く、そして、広がっていることに気付いてもらいたい。

さらに、この学習を通して、相手を想う（想像する）心を育み、それを周りやこれからの自分の生き方に広げていってほしいと願っている。この交流が今後も末永く続いていくための第一歩として、これまでの5年間を「冊子」にまとめたいと考える。

2 活動内容

- (1) 対象者 帯山西小学校4年生（102名）
- (2) 教科 総合的な学習の時間（帯西むらさき学習）
- (3) ねらい

- ①これまでの交流の歴史をたどったり、東日本大震災や階上小学校について調べたりする活動を通して、交流にかかわってきた人たちの思いに気付き、これまでの交流を大切にしていくために自分たちにできることを考え、やってみたいという意欲をもつことができる。
- ②インターネットや本など資料を使って調べたり、先輩や階上小学校の人たちや交流にかかわってくださっている方々に話を聞いたりすることにより、共通の体験をしたものとして被災した人の気持ちに迫ったり、震災による様々な被害の現状に気付いたりすることができる。
- ③集めた情報を整理したり分類したりしながら、学んだことや自分の思いを表現することができる。

(4) 活動の特色

ほとんどの子どもたちは、「気仙沼」「宮城県」と聞けば「はっ…」となるが、階上小との交流について関心の高い子もいれば、ぼんやりとは知っているという程度の子もいるのが現状である。

これまでの交流活動を通して、交流が一方的なものではなく、階上小の子どもたちの頑張りに励まされるとともに、子どもたち自身の本校に対する愛情や誇りも高まってきている。さらに、保護者の方や地域の方からの励ましや協力をいただくようになってきている。

また、この交流活動が長く続く理由として、交流のコーディネーター役（宮城県在住の佐藤さん、播磨屋さん、岩手県在住の金野さん他）の存在があることにも気付いてきた。多くの方とのつながりができたこと、さらにつながっていくためには努力が必要なことなど、これまで私自身が気付かなかったことに気付かされる貴重な機会となっている。

(5) 活動の位置付け

1 学期	2 学期	3 学期
<p>「階上小学校について知ろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・階上小学校って？ ・東日本大震災について知ろう ・熊本地震と重ねて考えよう。 ・自分の課題を見つけよう。 <p>(10 時間)</p>	<p>「これまでの交流から学ぼう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの交流を知る。 先輩たち、階上小学校の人たち、佐藤さんたちに聞こう。 ・学んだことを伝えたい。 誰に、どんな方法で伝えるか。 「階上小交流読本」にしよう ・どんなことを伝えるか。 ・役割を分担し、それぞれの課題について調べる。(40 時間) 	<p>「学んだことをまとめ広げよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共に生きることについて学んだことを「交流読本」にまとめる。 (交流の歴史や交流によって生まれた気持ちなど) ・「階上小交流読本」を作ろう。 ・階上小学校に伝えよう。 <p>※職員の交流派遣 (20 時間)</p>

3 活動の実際

1 学期「階上小学校について知ろう」

- ①どこにあるのだろうか？ ②気仙沼ってどんなところだろう？ ③どんな学校だろう？

2 学期「これまでの交流から学ぼう」

- ①いつ、だれが始めたのだろう

平成23年9月から当時の4年1組が始めた。

- ②どんな目的で始めたのだろう

「困っている人たちのために辞典や絵本などを送りたい。」

「自分たちにできることをしたい。」

- ③どんなことをしてきたのだろう

【本を送ろうプロジェクト】

- ・本や未使用の文房具と靴下などを送った。
- ・復興新聞コンクール

【階上小学校とつながろうプロジェクト】

- ・手作りおもちゃやメッセージ
- ・緑化活動で得た菜の花やふうせんカズラの種

【階上小学校となかよくしようプロジェクト】

- ・梅干しや梅ジャム
- ・ビデオレター作成
- ・帯西カレンダー
- ・今年もよろしくメッセージ
- ・「交流のカギの旗」を交換
- ・ムラサキの種を送付
- ・水仙園の整備
- ・階上の塩を使った高菜漬け送付

3 学期「学んだことをまとめ広げよう」

- ①どんな願いをもって取り組みたいか。どんな「階上小交流読本」したいか話し合おう。

- ②「階上小交流読本」を完成させよう。(300部印刷、配付予定)

- ③階上小に思いを伝えよう。

※3月8日(水) 気仙沼市立階上小学校への職員の交流派遣、交流会参加

4 活動の成果

- 交流自体を目的に何か特別なことをするのではなく、日頃のボランティア活動や緑化活動によって得られたものを生かすようにして進めることができる子どもたちに育ってきた。
- 階上小との交流の中で、本校にあるものや伝わってきたものに誇りをもつことができるようになってきた。また、遠くても、「つながりたい…」と思えば、つながることができることを実感できるようになってきた。さらに、子どもたちの中に、つながりを大切にしようとする心を育ってきた。
- 「階上小との交流読本」の執筆に取り組んだことで、学年の子ども同士の横のつながりや、校内における学年間の縦のつながりへと広げ、深めていくことができた。また、3月に職員を階上小に派遣し、子どもたちの思いを直接届け、階上小と交流する機会ができた。
- 70時間に及ぶ長いスパンの活動であり、「何のためにやっているのか」という目的を見失いがちだったが、子どもたちは互いにうまく確認、共有が図られてきた。本校の特色ある取組として定着できた。